

Q 先生の化学科志望の理由は何ですか。

A 日本の化学産業は、昭和30年代から伸びてきて昭和40年代に最も盛んになりました。

当時機械工学科、電気工学科にも根強い人気はあったけれどもブームにのったのは化学でした。

そういうわけで、そのころは化学、化工志望の学生が多かったわけですね。

Q そのころの東工大の雰囲気はどうでしたか。

A 今よりももっと暗かったですね。今の学生のようにあれもやる、これもやるという多面性に欠けて

いて、ひとつのことばかり一生懸命やる人が多かったと思います。

先生達とは、大変仲がよく対話する機会も非常に多かったですよ。

今はどこかしら先生と学生の間に壁があるように感じます。少なくとも先生方の方はもっと学生と話がしたいと望んでいるのですか。

Q そのころ女子学生はどのくらいいましたか。

A よく話題になる話ですね。はっきりとは覚えていませんが、1つ上の学年に1人、1つ下の学年に2人くらいいたかな。とにかく少ない。

だから今と同じで、クラブなどで

INTERVIEW

足田 巧 助教授

昭和三十七年理工学部
化学科卒、現在の専門
——光化学反応における
初期過程の研究



他大学（女子大が主）といっしょにやったりしていましたよ。

それからそのころは社交ダンスが流行っていたから社交ダンスを習おうってことで交流を図っていましたね。

とにかく今の学生よりはずっと奥手でしたね。

Q 東工大の大学生活で、先生の心に残ることは何ですか。

A 私は非常にのめり込むタイプですから、1年から3年にかけてはひたすら自動車部に夢中でした。

そのころはあまり自動車がなかったから、学生の身で自動車に乗ろうとするとはやはり自動車部のよう

な所に入らないと無理でした。

大学4年間でかなりあちこち行きましたが道も車もガタガタで大変でしたね。

徹夜で車を修理して、次の日の授業に出られなかったこともありました。

Q 事故とかは……。

A 1人でどこかに突っこむってのはありましたね。植えたばかりの田んぼに突っこんで田植えをしたこともありました。(笑)

Q では1年から3年までは自動車部ということで、4年では何をしてましたか。

A やはり卒研ですね。

高分子の膜を色素で染め、その色素を一定の方向に並べて性質を調べたのを覚えています。

Q大変でしたか。

A気持ちの持ちようでしょうね。やらされていると思うと大変でしょう。

反対に、高い実験器具は国が買ってくれて、ただで遊ばせてもらっていると思えば、かなり楽しくできるじゃありませんか。

今の学生にも同じことを言うんですが、あんまり分かってくれませぬね。

しかしさすがに院に行くと大変でいくら考えても、いくらやってもうまくいかななくて投げ出したくなったことが何度もありました。

Q先生は、カナダ、アメリカと留学されていますが、その時の話を聞かせて下さい。

A我ながら大変よく勉強した時期だと思っています。というのは、前年度のテストの成績によってその年の奨学金の額が決まるという具合だったので、気がぬけなかったんです。極端に言えば1点いくらという感じで。

それにあまり成績が悪いと退学にりますしね。

Qすごく厳しいですね。

A学部は、入学のときに定員の3倍の学生を入れて1年から2年になるときに3分の1にしてしまうんです。

ですから学部生にとってその1年間は入学試験というわけですね。

2単位落とすとあっさり退学ですから。

Q恐いですね……。

ところで先生は、留学先で大学を4つも変わってらっしゃるんですが、何か理由でも。

A勤めた大学は東工大も入って3つですが、仕事などでも同じ会社になぜといることはしなくて結構移動するんです。社会的風潮からか、

わりと動きやすいシステムになっていて同じことが大学にも言えるわけです。なるべくいろんなところでいろんな経験を積む方がいいという考えがベースになっているでしょうね。

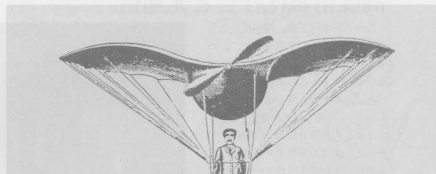
1ヶ所に定住するのは確かに居心地がいいことですよ。しかし、人はあちこち動いた方がためになるんじゃないでしょうか。

移動して新しい所へ行くと大変緊張します。

なぜなら周りみんな見えますからね、今度来たのはどんなやつだろうって。

そんな緊張を繰り返すのがいいんでしょう。

Qそろそろ最後なんです、先輩として今の学生について思うことを



お聞きしたいのですが。

Aみんな先を読みすぎて、安全な道をとりすぎてはいませんか？

もう少しある意味で無鉄砲であってもいいと私は感じるんですが。周囲からの援助など全く期待せず突っ込んでいけば、大体うまくいくものなんだし、もしまずいてもそういう場合は自然と道が開けてゆくものなのです。とてもできそうにないこと、まわりもやめろということでも一度決心に挑戦したことなら、たとえ思った通りにいかなくても、そのためにどうしようもなくなるということは考え難いでしょう。だからもう少し我武者羅になってほしいと思います。これは若者の特権ですよ。